

オランダ人長工師セ・イ・ファン・ドールンによる実測調査

■ 第七回目の元禄潜穴の改修工事

文久元年（1861年）から翌年にかけて仙台藩が行った改修工事から20年が経ち、元禄潜穴は、土砂や流木等がつまり、排水機能は極めて悪くなっていた。鳴瀬川も河道が変わり、堤防が荒廃していた。一度大雨が降れば品井沼の水は、たちまち周囲にあふれ出し、また鳴瀬川の大水は小川（こがわ）を逆流して毎年のように水害を繰り返した（別添 ＊補記「品井沼水害発生年表」を参照）。

<https://www.waterways-japan.net/13-1>

宮城県令松平正直は、元禄潜穴の改修の必要性を痛感し、国の支援を得るため、大蔵卿の大久保利通に数度にわたり要請を重ねた。これにより、国の補助を受けることに成功し、明治十三年（1880年）七月から九月にかけて改修工事を行った。元禄潜穴ができてから第七回目の工事であった。

元禄潜穴の開削工事から第六回までの改修工事は、仙台藩の直営工事であったが、明治という新たな時代における最初の改修工事が国の補助を得たことは、この品井沼干拓に国が関心と認識を深めたという大きな意義を持つものであった。

■ オランダ人技師ドールンの実測調査の結果

宮城県令松平正直は、品井沼の問題を根本的に解決するためには、更に詳しい調査と、それに基づく計画を綿密にたてる必要があると考え、内務省と再三にわたり要望・協議を続けた。この努力が実を結び、内務省のお雇い技師セ・イ・ファン・ドールン（1837. 1.5～1906. 2.24）が派遣されることになった。

ドールンは、明治5年（1872年）にオランダから内務省土木局に長工師として招かれ、利根川、淀川、信濃川、木曾川の改修、安積疎水（あさかそすい）、野蒜築港などの測量・調査や設計等に当たって実績を残していた。

ドールンは明治12年（1879年）に来県し、15年（1882年）にかけて品井沼の実測をした。そのドールンの報告の内容は、次のようなものであった。

「隧道は、その長さ1220尺（約370メートル）、幅12尺（約3.6メートル）、高さ九尺六寸（約2.9メートル）のもの12条を必要とする。工事費は巨額となり、放水路の改良によって耕地となるべき1万反の価格を上回るだろう。副図に掲示した計画の実施如何は、耕地の価格、隧道の築費等を精細算査したのちに決めるべきである。」

品井沼の水を排水して干拓することは理に合わないとするこの報告書に、権威あるオランダ技師による調査に大きな期待を寄せていた松平県令や沿岸村民の失望は大きかった。